

化文の江

三

。秘密の一つを
心配せずとま

藤家にも日吉は
ある「い」

れども彌兵衛の胸の内には誰にも言えない
な不安が芽生え、苦悩の日々を送っていた。
これは、意宇川の川普請が、まだ本物では無
いう不安だった。

に巻われようとも、その水が岩山にぶつか
の中に入つて来ないようにするには、もつ
つと岩山の切り通しの幅を広げなくてはな
い。そうしなければ不安は消えないのだ。

彌兵衛、川幅をもつと広げよ。——
彌兵衛、中途半端なことをしてはならぬぞ。

は言え、久二は、これ以上の吉テを押し付
ことは出来ない。

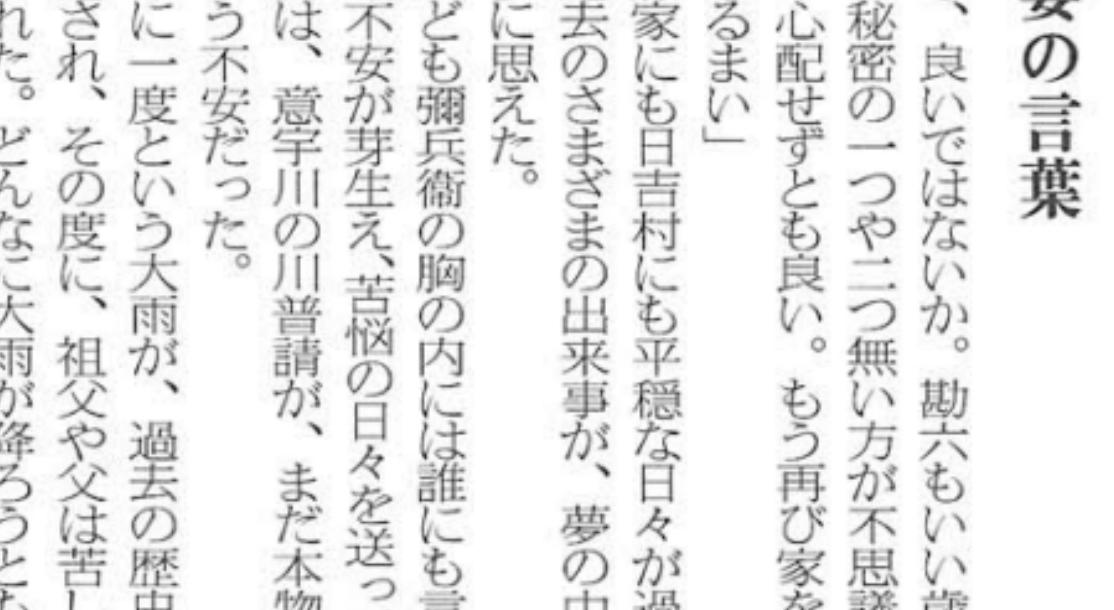
だが、彌兵衛の心中では、一つの決意が
つつ有つた。

実、この数か月の間に彌兵衛は、人が変わ
ようにやつれ、目が鋭くなっていた。
され、彌兵衛の氣付かぬところで、心の苦
表情に表れていたと言える。

り、目を閉じて、自問自答を繰り返した。んな彌兵衛を再び奮い立たせたのは、他な妻、クニの言葉だった。

いるのが、旦那さまのいちばんの幸せでござ
ましよう。いくら私が旦那さまのお体を案
も、心が死んでいる旦那さまを見るのは、
と辛ハニヤでござります。私のことなら大

「おまえの心が、まるでわからん。おまえの心が、まるでわからん。
二は、彌兵衛の苦悩をすでに見抜いていた
ある。」「おまえの心が、まるでわからん。おまえの心が、まるでわからん。
でござります」



う再び家を出る

は誰にも言えな

過去の歴史の中

水か岩山にまで
にするには、も

二〇

半時も座り込む

卷之三

周藤家の財政で
これ以上に、いく

の勘六に庄屋の

案じていた、

兵衛は、人が変

谷を繰り返した

が出来ない

ひまを見るのは
私のことなの